

II

ぎじゅつの文化

1 狩 猟

がんらい狩猟民であろうこのヤノママ族も、今は農耕に依存し、定着し始めて、生活の中に占める狩猟の役割は減少してきている。

しかしながら、狩猟は男たちにとって、今なお重要な労働であることにはまちがいない。

現在、彼らの使用している狩猟用具には弓、矢、それに銃がある。このうち弓矢は彼ら従来のものとされるが、銃は最近FUNA I（インディオ保護局）が持ち込んでいるものである。銃の普及により彼らの狩猟における方法にも変化がみえ、未開社会の狩猟民の特徴とされるところの集団狩猟の形態も、この近代的狩猟用具——銃によって、個人的な狩猟となってきている。ここに述べるシリアナ族においても、今日ほとんどが個人で狩猟に出かけている。

通常の狩猟の場合（その日の糧になるに充分な量だけ獲得する場合）の1回の行動は午前中か、あるいは午後から夕方までか、長くとも1日以内には終えて部落まで戻ってくる。

ロベルト部落（約80人）においては、ケモ

ノを対象とした狩猟用具は、銃、弓矢であるがこれらによる収獲物（特に大きい獲物のバク、野ブタ、アルマジロ）は1週間に1度ぐらいの割合で獲ってくる。ただ、鳥類などは、ほぼ毎日、部落のだれかが1羽は獲ってきていた。

これら獲物の分配については、大きい獲物であれば、部落の数人に分け与える第1次分配をとる。また特に大きいバクなどの場合には、それが第2次、第3次分配となっていく。しかし、小アリクイや野ネズミ、鳥類などは狩猟者の親族内だけで分け与えられるのがつねである。これらの場合、狩猟者はその獲物は口にしないということであるが、このことについては“食”の項であらためて書いている。

1人で出かける狩猟以外に、グループを組んで出かける狩猟形式ももちろん行なっている。この場合、5～6名が1つのパーティーを組んで行動し、その行動半径は200km以上にもおよぶ。時間的には、片道1週間ほどの狩猟の旅である。この時のパーティーの組み方は主とし

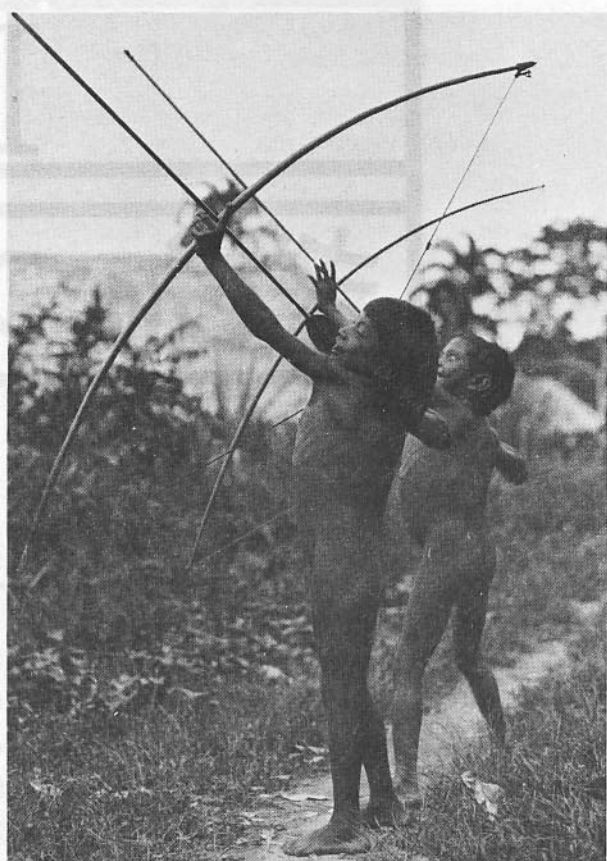
て、親族単位で組むことが通常である。この集団狩猟における獲物は、オンサ（ジャガー）、サル、バク、アルマジロなどの大きいケモノを対象としている。

また特に、大きい祭りなどが開かれるような場合においては、多勢の来客の糧を得るために4～6週間にもおよぶ狩猟の旅をすることがある。この場合も、パーティーの数は5～6名であり、対象となる主たる動物は野ブタ、サル等である。

狩猟に出かける際の様子は、とりたてて何か儀式を始めてから出かけるといったようなものはなく、ごく日常的に行なわれている。

部落には多くの犬が飼ってあるが、狩猟に犬を利用することはしない。彼らはケモノの足跡や、シゲミの中にいる鳥などを見つける技術は抜群である。我われがいくら、狩猟に同行したときなどは、うっそうと繁った樹々の中に矢を放つと、みごとに1羽の鳥を射止めた。彼らにとって狩猟の際には我われはもろろんのこと、犬さえも無用のものであり、有害なものなのであろう。

ヤノママたちの狩猟方法は弓矢、銃以外によるものはない。ことに、ワナ（仕掛け）のたぐいは存在しなかった。



男の子にとって弓矢とは、最高、最上の玩具であると同時に、その練習は将来に備えての欠くべからざるものなのだ

<狩猟用具について>

弓…… ヤノママ族のことはでく（ラハスイ）と呼ばれ、長さ2m前後の長いものである。ヤシ科の堅く重い材質の木（ヒーイ）で作られており、弓のそりはほとんどなく、両先端は細くとがったようになっている。

弦は麻のひもを燃ったものを用いている。張力は30～50kgと非常に強く、我われが精一杯引いても引ききれないぐらいである。ただ、

彼らがこの弓矢を使用する場合も、弦は一杯には引かずに矢を放つ。

非常に堅く、水にも沈むこの木を、彼らは丹念に削り、作り上げていく。この木を削る作業に用いる刃物は、野ブタの下顎骨を用いる。直径5～10cmの太さに荒けずりした原木を、この骨で作った刃物で直径3cm程度になるまで仕上げる。出来上った弓の断面は丸形と半楕円形とがある。弓の自重は1kg前後となる。

矢……原語で<シャーラカ>と呼ばれている禾本科植物の茎で作られてある。軽い、節のない葎のような草本で、内部は内壁にスポンジ状の肉がつき、あとは中空になっている。シャフトの直径は2～3cm、長さは2m50cmにおよぶものもあるが、自重は300g前後という、きわめて軽いものである。なお<シャーラカ>は同時に「矢」のことでもある。

矢羽根は2枚で、モットン（うずら科の黒い鳥）の羽根を「らせん」に取りつけている。

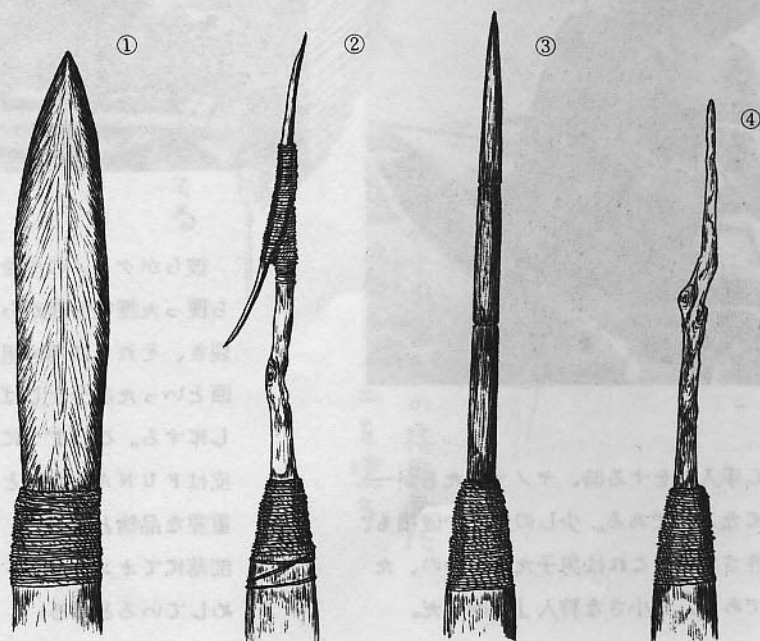
また矢尻はそれぞれの対象、用途に合わせて4種類ある。（図参照）

①竹を平らにし、流線形にしたもの。大きなケモノや魚をうつためのものでこれには、多々、波状の模様がほどこされ、ウルク（赤い染料）で染められてある。

②細い鳥の骨（またはケモノの）と木を組み合わせたもの。これの用途はもっぱら鳥をうつもので、木の先に付けられた骨が「もどり」の役目をしている。

③細く削った竹に<ヤッコアナ>（クラーレ）を塗りつけてある。長さは15cm、幅が1cmくらいで、3cmほどの間隔で切り目が入れられている。これは獲物にささったとき、クラーレを塗った矢尻だけが体内に残るようにしてあるのである。一般的に②以外の矢尻は、シャフトに差してあるだけで固定はされていない。また、このクラーレ毒は獲物を殺すものではなく、一時的にマヒさせるもので、とどめをさすにはテルサード（山刀）か棍棒が用いられる。

④は細くとがった木だけのもので、簡単につくられ、また簡単に使い捨てられる。子どもたら



が果物を落としたりして遊ぶためや、漁に使用される。

ヤノママたちは矢に関して、非常に神経をつかい、つねにシャフトのひずみや矢羽根を調整している。

このほかの狩猟用具としては、棍棒、山刀があるが、これらは弓矢や銃で撃った獲物にとどめをさす程度の、いわゆる補助用具として用いられるだけである。山刀はFUNAIがさし入れており、ブラジル語でテルサードと呼ばれるなぎなた形の刃物である。棍棒についてはミッションから聞きおよんだだけで、実際に使用されているのを見たことはなかった。

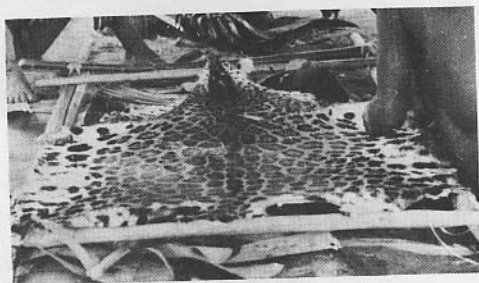
最後に矢のつくり方を付しておく。

(矢の製作方法)

- ①<アタラヒ>を2 m前後に切る。
- ②<アタラヒ>の一方の先に矢をつがえる部分—アローポイント(数cmの長さに切った木を野ネズミの歯で作ったナイフで形づくりをする)をねじ込んで、その上に、木綿の糸をまく。
- ③流線形に整えたモットンの羽根を本体にとりつける。この場合、羽根は木綿の糸で本体にしばられるのだが、本体と羽根の軸の接する面には焼いたタバコの葉を接着剤としてぬる。
- ④矢じりの方の本体の先を2~3 cmに割り、矢尻をとりつけた後に糸をまきつけ矢が完成する。



弓矢の手入れをする時、ヤノママたちが一番真剣になる時である。少しの歪みや破損も、決して許さない。これは男子たるものの、たしなみであり、「小さな狩人」も同じだ。



彼らがケモノの皮をなめすには、撃ち獲った獲物を腹から顎にかけて切り裂き、それを四角に組んだ木に足、尾頭といった部分をしばりつけて日影干しにする。このようにして干された毛皮はFUNAIなどとの交易に用いる重要な品物となる。写真はロベルト部落にてオンサ(ジャガー)の皮をなめしているところ。

◇ 矢の 製作方法

